

【ねがいましたは】

令和5年9月3日

KYOWA SCHOOL

第399号

「凧良さん」

—地べたをはいつくばってでも生きてさえいれば、つらい過去はいずれ最強のカードへと変わることを大人になってから知りました—

これは読売新聞 2023.8.21 朝刊、「STOP 自殺#しんどい君へ」という社会欄に載っていた記事の中の一文です。

さて、この方はどんな方なのか・・・母子家庭で育ちました。母は仕事の関係であまり家にいなかった。小学校6年生の時、10日間、母は帰ってこなかった。「度を超えると、怖さも苦しみもつらさも感じなくなってしまう。感覚が麻痺していた」と語っています。結局担任の先生が異変に気づき助けてくれたそうです。そのまま母は帰らず・・・児童養護施設での生活へと移ります。つまり簡単な表現で「捨て子」ということです。12歳になっての捨て子・・・年齢が年齢、自分を強く意識し始める年頃です。その方にとって学校は唯一普通の子どものようにふるまえる場所であったそうです。そして普通の子になりたくて高校へと進学します。しかし、高1で自主退学をしました。

その理由です。—学校指定ではない綿の開襟シャツで登校したところ、サッカー部の顧問だった先生に門の前で「帰れ」と追い返されたことがきっかけです。その先生は「服装の乱れは心の乱れ」と生徒には厳しい一方、自分はパンツ1枚でグラウンドを歩くような人でした。「これ以上、無意味で不条理で矛盾したことに従うのは嫌だ」と、それまで抑え込んでいた怒りが爆発しました。幼いころから他人の中で常にビクビクと身を縮め、心から幸せだと思うことは一度もなかった。だったら一人で生きていった方がマシじゃないかと開き直ったのかもしれない—

「すごい」の一言に尽きます。

お名前は、凧良（なぎら）ゆうさん、50歳の方です。作家です。

その後、施設を出て就職しましたが、15歳で自立することは想像以上に大変だったそうです。まず、「中卒」「施設出身」という肩書だけで足元を見られ、月給は7万円ほど。生活できず半年で辞め、アルバイトの掛け持ちでその日暮らしに入ります。それが30歳まで続きます。

彼女を絶望一色へと染めずにはすませたのが、「物語」の存在だったそうです。小学生当時、近所の小さな本屋に毎日通い、漫画や児童書を立ち読みしたそうです。物語の世界は彼女にとっては逃避の意味が強かったそうですが、「生き延びるため」の必要不可欠なものだったそうです。そして30歳になった時、好きなだけ小説を書きたいと思い、作家になったそうです。

彼女を救った「物語」、本屋で立ち読みができたからこそ手にできた「宝物」・・・本屋さんが彼女の命を救ったこととなります。タダ読みOKの本屋さんが命を救ったのです。活字が救ったのです。

彼女はこう言っています。「正直、人生はしんどいことの連続です。家にも学校にも居場所がない子は、小説や漫画、何でもいから逃げ込める場所をつくり、心を守ってほしい。他の誰かと比較したり、こうあるべきとの幸せにとらわれたりしないでいい。自分にとっての幸せを見つけ、それぞれが自分の人生を生きていけばいいのです。」

実体験から生まれ出るご本人の「ことば」に強い衝撃を覚えます。これが「生きる」ということなのか・・・。

ここまでどん底へ落ちた方がいらっしゃるのか・・・。最も「すごい」と感じたのが、高校を自主退学されたことです。「先生」と肩書の付く方に真正面から絶縁状をたたきつける爽快感がうれしく感じられました。何から何までトップダウン「私の言うことはすべて正しい、だから命令通りに動きなさい、反論は一切許しません。」これが現状です。

「先生、中学校へ行くと、なぜテストのたびに順位が出るのですか？順位って必要なものなのですか？」

「先生、この前のテストで選択問題の時、私はわからない問題は選びませんでした。でも、隣の子はデタラメ選んだら合ってたといって喜んでました。それでも点数の高い方が良いのですか？」

「先生、漢字の宿題を出されるのはいいのですが、この前となりの〇〇さんに『これ読める？』と聞いてみたら『しらな一い』と言ってました。これって宿題の意味がないように思いますけど、どう思いますか？」

「先生、いつも私たちに『助け合うことが大切です』って言ってますが、テストや順位や成績で競わせるのって、助け合っていないように感じてしまいます。なんか皆『敵』に感じてしまいます。先生、勉強って助け合うことじゃないのですか？」

きっと、この記事に出られた今の凧良さんがそのまま学校で児童・生徒として座っていらっしゃったら、堂々とこのような質問をされているかもしれません。学校は「なぜ」を「なるほど」にする場所であるはずですが、しかし、現実、子どもたちは何の抵抗も見せず、ただ現状が「あたりまえ」だとして生活を続けています。

ことばに変えられない、悶々とした心を宿したまま学校に通い続ける子どもたちの傍らに、最もふさわしい「添い」をいただけることの出来る方がいらっしゃいます。その方は子のこころの傷をしっかりと受け止め、理解し、たとえそれが世間でいう『ダメ』なことであっても、唯一の『味方』として君臨されています。

小学校当時の凧良さんに一番必要だった方です。